

宮崎会員の隨想・「忘れ得ぬ労使の人々」第19話

「けじめ」 歌田勝弘 味の素会長・ 経団連副会長

日本生産性本部は洋上研修のために商船三井の豪華客船「ふじ丸」を2週間チャーターした。団長はわが国経済界の重鎮である味の素の歌田勝弘会長、特別講師には木村尚三郎東大名誉教授を迎えた。いずれも夫人同伴である。歌田さんと木村先生は高等学校の先輩後輩の間柄でお互い気心の知れた仲である。私は事務方の総責任者で団長を補佐する副団長を命じられた。

洋上研修を目的とする“生産性の船”は、日本全国の企業から四百名が参加、大勢の見送りの人たちとしばしの別れを惜しみ、五色のテープが飛び交うなか東京港の岸壁を離れた。

客船にはさまざまなしきたりがある。その一つに船長は航海中、朝・夕の食事はメインテーブルで乗船客と一緒にする習わしがあり、テーブルを囲む顔ぶれは航海中不動である。

今般のメインテーブルは、世界を股にかける船長、財界の大御所歌田夫妻、加えて歴史学者として高名な木村尚三郎夫妻など千両役者がそろい談論風発、時には伺い知ることのない歌田家の内実を夫人が披露したり、亭主閥白と思っていた木村先生が奥方にはまったく歯が立たない一面を見せたりと常に笑い声が巻き起こる楽しい団欒の場であった。

歌田夫人によれば結婚以来一度もご主人の怒った顔は見たことがないそうで聴き入る一同を驚かせた。後で木村先生に「家庭でも立腹された顔を見たことがないとお聞きし、本当かなと首を傾げました。そんなことあり得ますか?」と尋ねると先生はしばらく黙っていたが「ウーン・・・歌田さんなら本当かもしれないね」と呟かれた。



太平洋上の歌田・木村夫妻



ふじ丸の桜ラウンジ歌田夫妻

船内で研修が始まる
と時間を持て余す
のは団長と副団長だけ
である。デッキで本を
読んでいるとマイク
で呼び出され「団長が
船内の大風呂へ行き
たいので一緒に付き
あってもらいたい」と
のこと。二人で風呂場
へ行った。

街中の銭湯とは全く異なり、波頭しか目に入らぬ大海原での大風呂は、これ以上ない解放感で言葉を忘れる。団長の背中を流した。すると私に向かって「今度は私があなたの背中を・・」というのである。私は恐縮して辞退したがそれでもと言われ、ついに大きな手で肩を抑えられ背中を流して頂いた。忘れられない一コマである。

歌田さんはいつもにこやかで気さくなので、航海中皆さんから慕われ大変な人気であった。研修生から声がかかると気軽に出向いていく。頻度が多いので事務局は無理を重ねているのではないかと心配しきりであった。

二十一時を過ぎると、研修講師らが毎夜バーラウンジに集まり歌田夫妻、木村尚三郎夫妻を囲み美酒に酔い知れる時間となる。会話が弾み、腹がよじれるほど笑いながら時が過ぎていく。航海中毎夜続いたが歌田夫妻は疲れも見せず木村先生と共にいつも座の中心にいた。

歌田夫妻は、アルコールにめっぽう強く底なしの酒豪だ。お宅ではご母堂も加わり毎晩三人の酒盛りで賑わうそうだ。下戸の私は羨ましく人様の一家団欒を想像した。

乗船中歌田さんは毎夜二十三時になると大事そうにポケットから太い葉巻を一本とりだし、いい香りとともにふかしはじめる。喫煙の習慣は無いようだが、一日の“けじめ”をつけるために就寝前に必ず一本の葉巻を燻らす、すると気持ちがすっと切り替わるそうだ。

私のように“けじめ”的つけ方を知らず、過ぎた過去を襟襷切れのように引きずり、何もかも背負い込み抱え込み喘ぎながら悶々として明日を迎える者には「葉巻でも吸ってみようか」とふつと思わせたものである。



右から木村尚三郎先生・沢間生産性本部常務・歌田勝弘氏

下船後私の提案で“歌田夫妻・木村尚三郎夫妻を囲む会”を発足させ以後十五年以上続いた。座は国際問題、歴史や景気の話、下世話な話などその都度様々な話題で盛り上がり毎回あっという間にお開きの時間となる。

生産性本部の時の理事長は、一端話

し始めると夢中になる性癖があり、その場の雰囲気や人のことなどおもんばかり余裕もなくしゃべる、しゃべる、ひたすらしゃべりまくる。

周囲は、あれは一種の病気だと談じていたものである。

同僚はその頃流行りのテレビコマーシャルソング“やめられない、止まらないカッパエビセン”をもじって理事長を「カッパエビセン」と綽名した。

ある時歌田さんを囲んで懇談しようと席を設けたものの、この時も理事長が一人でしゃべっていた。当人は歌田さんの対面に座り歌田さんを見ながら話しかけている。聞かされる方は大変だが氏は嫌な顔もせず、にこにこしながら黙って聞いている。毎度のことながら同席した職員は気まずい思いで黙して語らずである。

先の宴席のお返しであろうか、歌田さんが会場をセットし先日のメンバーを招きたいと招待の声がかかった。役員に先の件を持ちだし「理事長も一緒ですか？」と尋ねると「いや、歌田さんが理事長をはずして来て下さい。彼が入ると懇談ができませんからとおっしゃるので声はかけてないよ」といった。

東京本部を定年となり神奈川県生産性本部で、引き続き生産性運動に関わることになった時、本部の理事長は代替わりしていた。

新理事長から電話で「来週の金曜の夜あけておいてくれ」と連絡があった。何だか判らぬまま当日車で銀座へ向かった。

銀座の料亭で部屋に案内され驚いた。そこには歌田さんと木村尚三郎先生がすでに座っておられたのである。



宮崎を送り出す壮行会を歌田さんが設営

歌田さんが私を横浜へ送りだす壮行会をセットされたのである。氏はすでに経団連副会長の要職にあった時で、分刻みのスケジュールを縫っての設営であったと思う。

思いがけず本を出版することとなった。出版社が勧めるままに恥ずかしげもなく出版記念会なるものを設営した。宴たけなわの頃、受付にいた友人が「味の素の歌田さんが来られたぞ」と耳打ちしてくれた。

「おめでとう。盛会ですね」といつもの魅力あふれるにこやかなお顔でお祝いの言葉をいただいた。個人のこういう小さな集まりへいちいち付きあう余裕はとてもないほどの多忙な中、わざわざ駆けつけて下さったのである。光栄に感じ嬉しくて頭をむやみに下げ続けた。



城島光力氏の後援会長歌田氏と左メルシャン鈴木社長

歌田さんは味の素の労組委員長であった城島光力氏（民主党・財務大臣）の後援会長を引き受けられた。

「お願いしますよ」と私にも応援を頼まれた。

尊敬している歌田さんの依頼である。この時とばかりに一生懸命悔いのないよう友人・知人に頼み歩いた。今では懐かしい思い出である。

城島氏を激励する会の席で「八十歳の坂を超えたので、後援会長を退くよ、それに二十六年間皆さんと一緒にした日本生産性本部の理事も辞任することにしたよ」と告げられた。この時私の気持ちの中では一時

代が去っていく寂しさを覚えたものである。

歌田さんとの出会いは指折り数えると、駆け出しの時代から現在に至るまで三十年になんなんとし、今に至るも続いている。

振り返ると歌田さんに初めて面識を得たのは、氏が味の素社長に就任された直後であると記憶している。

経営教育について産業界と生産性本部をつなぐ小冊子を定期的に発行する企画をした。歌田社長に創刊号の巻頭言執筆をお願いし「職人の昼飯」といった題名で寄稿いただき原稿を頂きに伺ったのがお目にかかった最初である。

この時通された味の素の応接室は、床半分が絵画で埋め尽くされていた。これはなんだろと思っていたら入ってきた歌田社長は、当社の副会長三郎助さんの絵ですという。後で三郎助さんとは誰か先輩に尋ねると味の素創設者の鈴木三郎助氏のご子息だと聞かされた。

鈴木家は三郎助を代々が襲名することになっているようだ。

経団連の会長・副会長は、これまで重厚長大産業のトップ就任が慣例となっていたが、初めて食品産業から歌田勝弘氏が副会長に選任とマスコミが大きく報じた。それを見て大層興奮した。当時の本部の理事長に「キミがなぜそんなにはしゃぐのかね」と嫌みを言われ、ほろ苦い思いをしたことがあった。

余談であるが“けじめ”について一考してみた。人間生きていくうえで大変重い意味を持つ言葉である。社会生活を営む上では何事によらず、物事にけじめや区切りをつけたうえで、次ぎに挑戦することがとても大事である。

けじめの一つに公私のけじめがある。だれしも公私の“けじめ”はきちんとつけねばならないことは当たり前で頭の中ではよく理解しているつもりでも、長年組織の中にどっぷりと浸かっていると、正義とか清廉といった、それまで持ち続けてきた心の持ち様がいつの間にか、これが怖いのであるが、鈍り感覚を失い公私の区別がほとんど無くなるのである。

人間とは浅ましいものである。ほんの出来心であったはずが、とどのつまり巨悪へ突っ走り、大切な人生を一生棒に振ってしまう愚かしさ・・・。

まあ頭の中ではよく判っているつもりながら、かくいう私自身、聖人君主でもない身、会社の切手を使って私用の手紙を出したり、コピーやファックスを私的に利用したり、時には勤務中に抜け出し展覧会を見に出かけるなどの時間泥棒を幾度も重ね、公私のけじめを忘れたまことに恥ずかしながらの小悪党である。

つまらぬ私事を述べたのも、生産性の船で歌田会長から、一日のけじめのつけ方を教えて頂いたことに感銘を受けたからに他ならない。

際限なく歌田さんとの出会いや時々の会話が思い浮かぶ。ご趣味が意外にもボーリングで最高226点

をたたき出しどと、新入社員時代オートバイにまたがり製品を売り歩いたとか、ドライブが趣味で外車を乗り回すとか、カラオケではちょっとハスキーで情感のこもった声で河島英五の“野風増”を歌われしんみりした心地で聞きほれたことなど記憶は尽きない。

またわき道にそれるが広報部長の時に生産性新聞新年号に“労使対談”を特集し進行係を務めた。経営側は歌田さんの後を引き継ぎ味の素の社長となった鳥羽董氏、労組側は温厚な紳士でゼンセン同盟会長の芦田甚之助氏で、後に結成された連合の第2代会長となる人であった。

対談中、鳥羽社長から思いがけないこぼれ話を伺った。同氏は登山が趣味で休暇を利用してエジプトに出かけ、ギザのピラミッドを登り詰め頂上に立ったというのである。山登りが好きでつい鳥羽さんの話にのめりこみ夢中となってしまい、同席していた記者から進行を促されてしまったのである。

私は釣りが趣味で高級魚のアマダイ釣りによく久里浜港から出船した。アマダイは40cmを超えると大きいと言って周りから羨ましがられる。50cmを超える獲物にはめったにお目にかかれないのである。

ある時52cmという大物が釣れた。唐突に歌田夫妻の酒豪ぶりを思い浮かべ酒の肴にと冷凍便で届けた。折り返し手書きの丁寧な礼状を頂いた。

国際会議でタイのバンコックへ出かけた。チャオプラヤ河のほとりに広大な敷地を持つ味の素の大工場がある。工場見学の希望者が多かったためもあり、お願いに上がったがなかなか見学の許可を頂けず、ようやく歌田さんのお力添えを得て大勢の見学者を受け入れてもらい丁寧な応接を頂き一同感謝したことであった。

際限のない記憶の連なりである。お年を召してこここのところ、しばらくお目にかかる事はないが私にとっては生涯忘却がたい温厚で風格のある経営トップである。